



レイン 12

光の当たる場所

η L P η η L I G H T

吉野 匠

Takumi Yoshino

アルファライト文庫





異世界に存在する大陸、ミュールゲニア。
科学文明の魔手はまだこの地を覆うことなく、^{すた}廃れつつあるとはいえ、いにしえより伝わる魔法も細々と受け継がれている。

そんな、剣と魔法が支配する世界――

シェラザード山脈の戦い――サンクワールやレイファンら同盟軍とザーマインの直接対決は、同盟軍側の勝利で幕を下ろす。

しかし、レイグル王を討ち取ることができず、ザーマイン軍もまだレイファン国境付近におり、その勝利は限りなく痛み分けに近いものだった。

一方、少年レインと宗主クレアは、人々に自らの組織の存在を広く知らしめるため、自分達の国を手に入れようと画策する。

そこで目をつけたのは、暴君バルダーが圧政を敷くバルザルグだった。

暗殺や襲撃を警戒し、多数の兵士と結界で守られたマイエンブルク城に引き籠もっているバルダー王。

彼を倒すべく、少年レイン達は王城へ奇襲を仕掛ける――



※^{どりようこう}度量衡はあえてそのままにしています。



ザーマイン

神聖ヴォルデンシア帝国

魔教の島

ノグ
シグマ
ローザニス
ラオルテン

ファヌージュ

ヴァンヘム

テセト

アザト

ヴァリ

ターム

サクレム

霧の国

テウセシ

ダマン

ナシド砂漠
(乾きの海)

セレスデア館

アヴェルーン

聖域

レビ湖

ポートフォリス

ガルドシュタイン

レイファン

クリスタルレス

フェリアーナ

旧ルナン

魔物の森

ナルスガル

ヨーデンセ

シャンドリス領

システイン族

シャトワール

ブルガンティ

バルザルグ

シャンドリス

リディア

サンクワール

地れ谷

ザワール

狼の島



【シルヴィア】
ヴァンパイア・マスター



【ガサラム】
レインの副官



【ラルファス】
サンクワールの上將軍



【クレア】
謎の組織の宗主



【アリサ】
魔族を狙う戦士



【ノエル】
レインに味方する魔人少女



【レスター】
クレアの配下の召喚士



【バジル】
クレアに心酔する大男



【タルマ】
クレアの姉



【リューン】
謎のホムンクルス



【ゲネシス】
セレスティアに現れた魔人



【ノース】
暴君の背後に隠れる魔人

主な登場人物

レイン

本編の主人公。本人曰く、
「傲岸不遜と常勝不敗が
売りの、世界最強の男」

シェルファ

サンクワールの
プリンセス
姫王。
レインに好意を
抱いている

レイグル

大国ザーマイン
を統べる王

レイン(少年)

クレア的能力によって
現れた少年時代の
レイン



目次

プロローグ 見切り 11

第一章 生死を預ける 23

第二章 空を飛ぶ 62

第三章 我は平穩を望む 96

第四章 魔を崇^{あが}める者達 143

第五章 鏡の都市 188

第六章 人の形をしたもの 230

エピローグ 光の当たる場所 281

あとがき 290

文庫版あとがき 292

プロローグ 見切り

クレア達の一行は、無事にバルザルグの王都、ファンティースに到着した。

もはや魔族を滅ぼす組織としては新たな転換をしつつある彼女達だが、しかし今のところはまだ隠れ潜む生活から抜け出せてはいない。

この点、組織の宗主であるクレアと――そして少年の姿をしたレインとは、意見が一致している。組織が公然と世間に名乗りを上げるのは、王都の北側にそびえ立つマイエンブルク城を落とし、バルダー王を倒してからでもいいだろうと。

そのようなわけで、今回も王都内にいる組織の援助者の元にやっかいになることとなった。

この国では有力な商人と呼んでいい男の屋敷に、クレア他幹部数名が潜り込んだわけだが……しかし、サンクワールで世話になった豪商の広い邸宅とは違い、ここはまた随分とこぢんまりした屋敷だった。

木造の三階建てではあるが、既に老朽化した古い建物で、申し訳程度についた庭も、十歩も歩けば、すぐに柵に行き着く。

中も庭と同様に奥ましく、一番広い部屋が一階の居間に当たる大部屋だったが、そことて六人も入れば窮屈に感じるだろう。

長所と言えば、あまり目立たない王都の隅っこに屋敷がある、というくらいだろうか。例えばサンクワールでは、一部の富裕な住民のお陰で国自体が豊かな印象があるが、あいにくこの国においては、事情が違っていた。

裕福なはずの商人といえども、他国よりは恵まれない生活を強いられているらしい。

「クレア様をお迎えするのは望外の喜びですが、このようなあばら屋にて、汗顔の至りです」

屋敷の主人である瘦身の中年が、一階のホールまでクレア達を迎えに出て、深々と一礼した。

彼の名はヴァレンといい、マイエンブルク城に食材その他生活雑貨を運ぶ役を一手に引き受ける、いわば城の御用商人である。

しかしその彼ですら、屋敷を新築するほどの蓄えも持たないらしい。

加えて、彼が王都内に持つ店は別として、この私邸には召使いの類も皆無のようである意味では徹底していた。

この国では、王とその周囲の僅かな太鼓持ち以外は、全員が等しく、豊かさとは縁がないらしい。

「気にしないでください、ヴァレンさん」

クレアは焦点を結ばない瞳を彼に向け、柔らかく告げた。

「食事ができて雨に濡れないだけで、ありがたいことですよ。急な連絡にもかかわらず、私達を迎え入れてくださり、嬉しく思います」

「とんでもありません」

古着に近い灰色のスーツを着たヴァレンは、またしても頭を下げた。

「先程も申し上げた通り、お役に立てるならこれほど嬉しいことはありません。私とて、組織の一員であり、使命を忘れたことは一度もありません。滞在中、なんなりとお申し付けください。ところで——」

服と同じ灰色の髪をした彼は、クレアとタルマの後ろに立つ黒衣の少年を見て、やつと尋ねた。

「どうも、最初から随分と気になっていたらしい。」

「え、彼は新しく雇った傭兵でしょうか？」

「雇ったというか、同志ですよ」

クレアはくすりと笑い、一瞬だけレインを振り返った。

「新たに我が組織に迎え入れた軍師兼、私の護衛兼、組織の幹部ですね。名をレインさんといいます。どうぞよしなに」

「は……それは」

予想以上に豪勢な紹介に驚いたのか、ヴァレンが目を白黒させる。

そのうち、レイン自身がぶつきらばうに述べた。

「今の紹介は、全部忘れていい」

むすっとした顔で、あっさりとかレアの言葉を全否定する。

「俺の立場はただの護衛が一番近いと思う。それと、俺はどこでも眠れるから、部屋も適当でいいし、食事もあり物でいい。あまり気を遣わないでくれると助かる」

「は……はあ」

どう反応したもののか苦慮した様子で、ヴァレンはやせ細った少年であるレインを見やり、それから微笑したままのクレアに目を向け、最後に肩をすくめたタルマを見た。

結局、クレアがまた静かに付け足した。

「私の言葉が真実ですよ。後から他の仲間も来るので、どうぞよろしく、ヴァレンさん」
「はっ」

慌てた様子で応えたヴァレンは、息を吸い込んでクレアを見ると、思い切ったようにまた切り出した。

「それで……今回のご滞在は、どのような理由で」

「マイエンブルク城を落とし、バルダー王を倒すんだってさ」

いい加減立っているのが辛くなってきたタルマが、いきなり横から口を出す。

文字通り、まん丸に目を見開いたヴァレンを見やり、人の悪い笑みを広げた。

「それもねえ、なんとこのレイン小僧が一人でやるらしいわよ？ 正直、世の中をナメてると思わない、こいつ？」

「きっかけを作るのは一人だが、後は手助けもいる。そう説明したはずだぞ」

レインが年齢に似合わぬ凄みのある睨みをくれたが、タルマは平然と胸を反らした。

「似たようなもんよ。とにかく、最初は一人なんでしょうが！」

「は……あの……いや、しかし——」

絶句したヴァレンは、かなり後退した額に震える手で触れ、おごとと皆を見比べた。

誰も応じてくれないので、やむなく自分で続ける。

「それはその、冗談ですよね？」

「なぜそう思うんだ？ たかが城一つじゃないか」

大注目を集めたレインが、無表情に言っただけ。

……無愛想さはともかくとして、タルマが見る限り、レインのやることはいちいち謎めいて見えた。

例えばファンティヌに着いた数日後、クレアがちらほらと集まりつつある組織のメンバーに対し、剣技を指導していたことがあった。

事情があつてバジルはまだ到着していないが、幹部の一人である召喚士のレスターが、遅れて来たせいで神官が纏うような白いローブ姿のまま、クレアと練習試合をやつたのだ。

クレアの腕はなにしろ組織内では一番（のはず）なので、時折こうして仲間に稽古をつけてやっている。レスターは剣技の方では専門ではないので、なおのこと、たまには稽古も必要となる。

いざ戦闘ともなれば、剣を使わざるを得ない時も考えられるからだ。

今回、クレアは地下の倉庫部屋を借り、木箱や樽などを周囲にどけて剣技指導を行っていた。

もちろん、相手はレスターだけではなく、タルマ本人も含めて、組織のメンバーが数名ほどいた。そこへ、珍しくレインがぶらりと顔を見せ、部屋の隅に置かれた木箱に座つたので、皆は大いに驚いた。

「……いやあ、あんたに稽古は必要ないんじゃないかなあ？」

日頃、意外とレインと上手くやっているレスターが、目を丸くして尋ねたほどだ。

余談だが、レインは絶望的に無愛想な割に、なぜか（一部を除いて）組織のメンバーの信頼が厚く、今や昔から組織にいたかのように溶け込んでしまっている。

こいつはむすつとして一言もしゃべらないことが多いけれど、姿が見えなくなると、どういふわけが妙に気にする者が多い。

それはもう、誰かが必ず「レインが見当たらないけど、どうしたかな？」などと、心配そうに周囲を見渡すのである。

『レイン小僧の七不思議』とタルマがこっそり命名しているほどで、これまで密かに数えていたところでは、レインの姿が見えない時に、それを指摘しなかった者がいた試しはない。

たまにクレア達が一階の居間になんとなく集まって話し合うことがあるが――仮に最初はレインが部屋にいて、途中からひっそりと姿を消しても、必ず誰かが気付いて口にするのだ。これはもう、不思議と言う他はない。

無駄に存在感が大きいようで、タルマとしては首を傾げざるを得ない。

とはいえ、愛想のなさは全く変わらない。やつてきた彼は、今もあつさりこう言つた。「稽古のいらぬやツなんかいないはずだ。ちよつと見学させてもらおうと思つたんだ」

「そうかあ。でもまあ、僕の剣技は無視して、クレア様のだけ見てくれよ？」

「俺の見たところ、おまえも筋は悪くないと思う」

どこまで本気なのか、レインがぼそつと返すと、レスターはまん丸な顔に満面の笑みを広げ、物凄く嬉しそうに笑った。

「よ、よせやい……へへへっ」

実におめでたいヤツである。

……と皮肉な目でタルマは見ていたが、案外、レインは本気でそう言ったのかもしれない。結局、彼女にもレインの本心はイマイチわからないのだった。

ともあれ、レスターの稽古が終わり、彼がくたくたになって引き上げた後も、クレアは疲れた素振りも見せずに残った全員の相手をしていた。

とうとう最後の一人であるタルマの番になっても、なぜかレインはまだ同じ木箱に座り、じつと稽古を眺めていた。

「あんたさ！　そこで瞬きもせずに見つめられると……（息切れ）……気になるんだけど」

宗主とはいえ、妹から木剣で首筋に寸止めされ、数度目の敗北が確定した時、タルマはついにレイン小僧を睨み付けた。

もちろん、堂々たる八つ当たりである。

「そうか、悪かった。……おそらく二度と邪魔することはないから、今回は許してくれ」
あつさりそう言って立ち上がったレインに、なぜか慌てたのはクレアである。

「二度と来ない、というほどのことでもないでしょう？　なにか、私に気に入らないところでもありましたか？」

「いや」

早くも立ち上がっていたレインは、すぐに首を振った。

「そうじゃなく——」

しばらく迷っている様子だったが、ためらいがちに述べた。

「もう十分に見せてもらったと思ったんだ」

タルマとクレアは、姉妹揃って顔を見合わせた。

「なにさ、それ？　もしかして、見るべきは全部見たってこと？」

「……私から学ぶようなことは、もうなさそうだということですか？」

これまた、姉妹揃って不機嫌な口調で尋ねる。

さすがのクレアも、やや慄然^{おそげん}としていた。

「俺にとっては、これも修練の一つだったんだ。そう気にしないでくれ」
意外なことに、レインは決まりが悪そうだった。

嘘をつきたくないので正直に述べたものの、後の展開に困惑した……そういう様子だった。

とはいえ、今更^{いまさら}遅い。

「よし、そこまで言うなら、クレアと一発やっちゃいなよ！」

タルマは大声でけしかけ、直後に慌^{あわ}てて手を振った。

「あつ。し、試合のことだからね、試合のっ」

「……何を焦^{あせ}ってるんだ、おまえは。言われなくてもわかってる」
洪面^{じゅうめん}でレインは返し、そのまま背を向けた。

「もうみんな疲れてるだろうし、必要もないはずだ」

「まあ、そう言わずに。私も興味があります、レインさん」

クレアはさつと退去しようとするレインの前へ回り込み、真剣な顔で彼を見た。

裾^{すそ}の短いチュニック姿だったが、既に手にはもう一振りの木剣を持っていて、それを素早^{すばや}くレインに押しつけてしまう。

「一度、お願いできませんか？ 貴方^{あなた}の現時点での實力には、私も興味がありますし」

「おお、クレアも意趣返^{いそへん}しすることがあるのねえ」

タルマはニヤニヤと笑い、自分が代わりに木箱に座り込む。

「さつ、思う存分、叩^{たた}きのめしちゃって！ こいつに寸止めとか、全くいらないし」

「いえ……あくまで練習ですよ、これは」

もはやすっかり不機嫌な表情は消え、今度はクレアの方が困惑していた。

「ただ、試してみたいだけです」

「……いいだろう。ちょうど今は、余計な見物人もいないしな」

迷っていたレインは、結局は思い直したのか、木剣を下段に構えた。

「俺はいつでもいい。殺^{ころ}す気で来てくれ」

至極^{しごく}真面目^{まじめ}な顔で、とんでもないことを言う。

さすがのタルマも顔をしかめたが、すぐに申し出た。

「よおーし、その言葉を忘れないでよ？ あたしが、臨時の審判役をしてあげようじゃないさ」

タルマはわざわざ両者の中間に立つと、片手を上げて二人を交互に見た。

「手を下ろしたら『はじめ』の合図ってことでもいい？」

「いいです」

「別になんだっていい」

二人の承諾を得た瞬間、タルマは自分が人の悪い笑みを浮かべているのが実感できた。これでさすがのレインも、少しは己の分を知るのだらう。だいたいこのレイン小僧は、ちよつと強いからといって、日頃から生意気である。

クレアに対しては「あんた」と呼ぶのに、自分に対しては「おまえ」と呼ぶのも、大いに気に食わない。

みみっちい私怨を胸に秘め、タルマは思いっきり手を振り下ろした。

「それでは——はじめっ」

第一章 生死を預ける

あの地下倉庫での練習試合中、見物人が自分だけで幸いだったと、タルマは後になつてから思った。

いや、そもそも試合直後は「こいつ絶対イカサマしてるでしょ!？」とタルマは思ったのだが……何度やろうと同じ結果になるのを見て、認める他はなくなつた。

……どうやらレインは、しばらくクレアの剣技を見物して、すっかり見切つてしまつたらしい。

はじめっ——とタルマが叫んだ次の瞬間、クレアは風のようにレインの間合いに躍り込んだのだが、彼の身体が残像を残して綺麗に流れたかと思うと、ぴたりと木剣がクレアの首筋で止められていたのだ。

一部始終を見ていたタルマでさえ、正直、何が起ったのかよくわからなかつた。

「ええっ」

「——まさかー」

タルマは当事者のクレアと共に、姉妹して叫んでしまう。どうにも納得できなかった。今現在のはれつきとした成人であり、上將軍として活躍もしているサンクワールのレインとだって、クレアはかなりよい勝負をしたと聞く。それがどうして、まだ十五歳やそこらの、ガキンちょレインに敗れるのか？

こんな理不尽な話はない。

「あんなに、手を抜いたわけ？」

タルマが思わず妹に尋ねたのも、当然だろう。

しかし、クレアの顔色を見れば、彼女自身にも意外なことだったとはっきりわかった。

「も、もう一度お願いできますか？ どうも納得がいきません」

「構わないが……今のままだと、何度繰り返しても同じだぞ」

レイン小僧が生意気なセリフを吐いたが、実際、彼の言う通りだった。

もう一度、両者が中央に戻り、木剣を構え直して相対し、タルマが合図を出す——今度もまた、先の試合と同じ結果になった。

というより、タルマの目には、前回より勝負が決まるのが早かったように思えた。

クレアの繰り出す必殺の斬撃は空しく残像を斬り、そして次の瞬間、死角から剣撃を放ったレインがクレアの急所です止めをする。

まるで、お互いに入念に打ち合わせたかのような動きで、開始合図と同時に双方が流

れるように動き、気付けばレインの木剣がクレアの首筋にびたりと当てられていた。

……本当に、呆れるほど瞬時に勝負がついた。

こいつら、わざとやってるのかとタルマが疑ったほどだ。

「……どうして」

ここ何年も見たことがないほど混乱した表情で、クレアがレインを見た。レインは実に居心地悪そうに答えた。

「あんたの調子が悪いんじゃない。前に言わなかったか？ 俺にはそういうことが可能なんだ。長く観察すればするほど、相手の動きが読めてしまう」

淡々と説明しつつ、例によってこいつは余計な解説もしてくれた。

いや、本人にしてみれば、クレアが受けたショックを本気で案じてのことかもしれないが。

「俺が無用の試合を受けたのは、実地で見た方が納得しやすいと思ったからだ。以前忠告しただろ？ 例のあいつとは絶対に戦うな。多分、あんたは前回の戦いの時にも死の淵にいたと思うし、次は確実に殺られる。これでわかってくれたと思うんだが」

困ったような顔でクレアを見るレインである。

「そう……ですね」

当のクレアは、やがて大きく息を吐き、苦笑めいたものを浮かべた。

「信じる他はありますまい。貴方のあだ名は伊達ではないそうですね。こう見えて、私も天才剣士扱いされてたんですが、自信が消滅する思いです」

「じゃあ、無闇にあいつに手を出すのはやめてくれるな？」

「ていうかさあ、今のはイカサマじゃないのー？」

タルマはしんねりとした目でレインを見やり、疑惑を表明したが……双方から無視された。

「ご心配をどうも。でも、今の組織は無差別に魔族を狩ることを目的としていません。放っておいても、もはやあの方とぶつかることはないと思いますわ」

「俺もそう思うんだが……言いたくないが、あいつは頑固だからな。状況によっては、そうとも言い切れない」

レインが大真面目な顔で首を振り、クレアとタルマは思わず顔を見合わせて噴き出してしまった。

このレインは……あくまでも自分こそがレイン本人であり、向こうはただの別人だと思っているようだった。

不思議なのは、本来はむしろ逆なのだが……彼と接しているうちに、タルマ達も少しずつそんな気持ちになってしまっていることだろう。

間借りしたヴァレンの私邸ではそんな出来事もあったものの、レインの場合、こっそり外出している時間の方が長かった。

しかも、妙にかさばる大荷物を背中に背負い込んで、ふらりと消えてしまう。

全て彼の自由にやらせているクレアが、「何をしているのですか？」と試みに訊いたことがあるが、レインは「下調べと天候の確認だ」と述べるだけで、具体的には何も教えてくれなかった。

というか、やはりこの王都ファンテーヌに着いてからも、今までと同様、レインは外出する度に生傷をこしらえて戻って来るていたらくで、クレアはもちろん、タルマもだんだん本気で心配になってきた。

無論、この場合のタルマの心配とは、レインが性急な動きをすることで、組織まで危険に晒されることを指している……つもりだ。

「あんたさ、いい加減、何をしているのか話しなよ」

地下の倉庫でおかしな工作などやっているレインに向かい、タルマはある日、断固として詰問した。レインは樽に腰掛けて、でっかい木片を相手に格闘しているが、何を作

ってるのやら、さっぱりわからない。おおざっぱに言うとか、こいつが削って形を整えているのは三角形の『何か』だが、それはあくまで『もっと大きな本体』の一部のように見える。

おまけに、黙々と工作用のナイフを動かしながら、レインは言うのである。
「話してもいいが、どうせ信じてもらえない」

「あつそう。なら、この際は逆にあたしがあんたに警告しておくけどさ」
と、タルマはわざわざ自分も木箱の上に座り込み、じつとレインを見た。

「バジルが明日、到着するって報告が来たよ。……あんた、わかってる？」

「それは、俺が恨まれてるのがわかってるのか、という意味なのか？」

レインはやっと木片を削る手を止め、タルマを見た。

——ああ、あたしはこいつの瞳が苦手！

ばっちり視線を合わせたタルマは思う。いつも思うのだが、二人きりの時は特にそう思う。

別に、こっちの胸やら腰やらを見るといった、たまに他の男性から感じる性的な視線では全然ない。本人の日頃の言動通り、実に静かに澄み切った、綺麗な黒い瞳なのだが。なぜだろうか、じつと見つめていると落ち着かない気分になるのだ。

タルマは、昔から夜空を見上げた時に、微かに畏怖を感じることもあるが……あの時の感覚と少し似ているかもしれない。

しかも、こいつの瞳は落ち着きすぎるほど落ち着いているように見えて、なぜか本当は灼熱の感情を隠し持っているような気がしてならない。

このレイン小僧は平靜そうに見え、実はそんなマグマのような思いを常に抑え込んでいる……タルマはそう思えてならないのである。

「……タルマ？」

黙り込んだタルマに、レインが静かに尋ねた。

目を瞬き、タルマは息を吐く。

「と、とにかくね、あいつはあんたのせいで、クレアの前で赤っ恥かいたと思ってるわけ、いきなり襲いかかってくる可能性もあるわ。いくらあんたでも、獣化したバジルとやり合うのは嫌でしょ？ 用心した方がいいんじゃない？」

「俺が、バジルと戦うことはない」

レインが、時折見せる不思議な自信と共にほざいた。

しかも、お得意の断定口調である。

「……なんで？ あんたなに、そこまで自分の実力に自惚れてんの？」

「違う。戦うことなどないと言ってるんだ。言い換えれば、あいつを相手に俺が剣を抜くことはない。だから心配いらない」

しれつと言いつけるレインに、タルマはもちろん眉根を寄せた。

言っちゃ悪いが、タルマはバジルと知り合ってから五年以上が経つ。あいつは小心者だが、切れた時は誰も手がつけれない。現についこの間も、タルマは山小屋で黙化したバジルとかち合ったばかりなのだ。

途端に、毛むくじやらのバジルの裸が脳裏に鮮明に浮かんだ。

「うわあ！ あんたのせいで、あいつのすっ裸を思い出したじゃないさつ。どうしてくれんのっ」

チュニツクの袖をまくって、鳥肌が立ったのをレインに見せつけ、タルマは思う存分、不平を鳴らしてやった。だいたい前回の事件でも、バジルのレインへの嫉妬心のお陰で、思わぬ巻き添えを食らったようなものだ。

それを指摘すると、しかしレインは、思いの外素直に低頭した。

「それは悪かった。だが、今回同じことがあれば、俺が直接、あいつと話すさ。だから、もう迷惑はかけない」

「迷惑っていうか……クレアも心配してるよ。あの子は事情がよくわかってないけど、バジルがあんたを恨んでるのは、何となく察してるみたいだからさ」

タルマは両手を広げて教えてやった。

本当はクレアにも、「バジルがあんたをレインに取られると思って、嫉妬しまくりなんだよねえ」とずばつと言つてやつてもよいのだが……妹にこれ以上余計な気苦労を押

しつけるのもどうかと思い、堪えているのである。

「……第一、妹はバジルを仲間としか思っていないからねえ」

わざとらしく眩し、タルマはレインをちらつと見やる。

しかし、この時のレインは頑なに沈黙を保った。

……結局、問題が解決しないまま翌日になり、バジルがとうとう屋敷へ来た。

バジルの来訪は、タルマから見ると最悪だった。

なにしろ到着した時、組織の中で唯一バジルを抑えられるはずの妹のクレアが、たまたま王都ファンティーヌの偵察のため、屋敷を出ていたのだ。

普通、そういう時はレインもついていくのだが、今回はレイン自身がクレアより先にどこかへ偵察に出かけていて、同行できなかった。

……なのに、午後遅くになってバジルが到着する直前、当のレインは屋敷に戻ってきてしまふ。

クレアがまだ戻らないのに二人が顔を合わせたわけで、全くもって最悪の事態だった。そもそもバジルは、すっ裸で山小屋のそばに倒れていたのをクレアに見られたと勘違いしている。

今回、「私用のため、後から追いつきます」などと旅立ち前に別行動を取っていたが、

実はそれは言い訳にすぎず、遅れたのはあの件を恥じたからではないかと、タルマは睨（にら）んでいる。

どうせ今の今まで、一人でどこかに籠（こ）もって呻（うめ）いていたに違いない。暴れたら手がつけれないくせに、本質的に弱虫のバジルは、クレアに対しては（色んな意味で）からきし駄目なのだ。

それでも、応対に出た屋敷の主人であるヴァレンと対応している時は、まだバジルは大人しかったのである。

なのに、余計なところへ余計なヤツ（つまりレイン）が屋敷のホールにわざわざ出てきて、その和やかな場面を凍り付かせた。

当たり前のような顔で奥から出て来て、バジルに軽く頷（うなづ）いて見せたのだ。

本人は挨拶（あいさつ）のつもりらしいが……これほど空気を読まない小僧（こぞう）を、タルマは寡聞（かぶん）にして知らない。

「――あ、あんたねっ」

心配で先にホールに出ていたタルマは、無論、慌（あわ）ててレインを隅の方へ引っ張っていた。

「なに考えてんのよっ。どうして出てくるかな！」

「なにがだ？」

「しれっと、『なにがだ？』じゃないわよ！ あれ見てわからない!?」

呆（あ）れてしまい、タルマは戸口に立つバジルの方に目配（め）せる。

革ズボンと麻のシャツという粗末（かつまつ）な格好（かっこう）のバジルは、髪（かみ）を逆立て、黒い瞳（ひとみ）を充血させてレインを睨（にら）んでいる。先程までは「お世話になります」などと、ヴァレンに低頭（ていとう）していたのに、今やそのヴァレンがたじろいで後退するような形相（ぎようそう）だった。

猫背（ねこせ）だったたくましい上体もまっすぐに伸び、二メートルに近い巨軀（きょく）がレインを威圧（いあつ）するように見下ろしている。

「わっ。いきなりこれ!?!」

遅れてホールに出迎（むか）えに来たレスターも、いきなり仰（お）け反（そ）っていた。

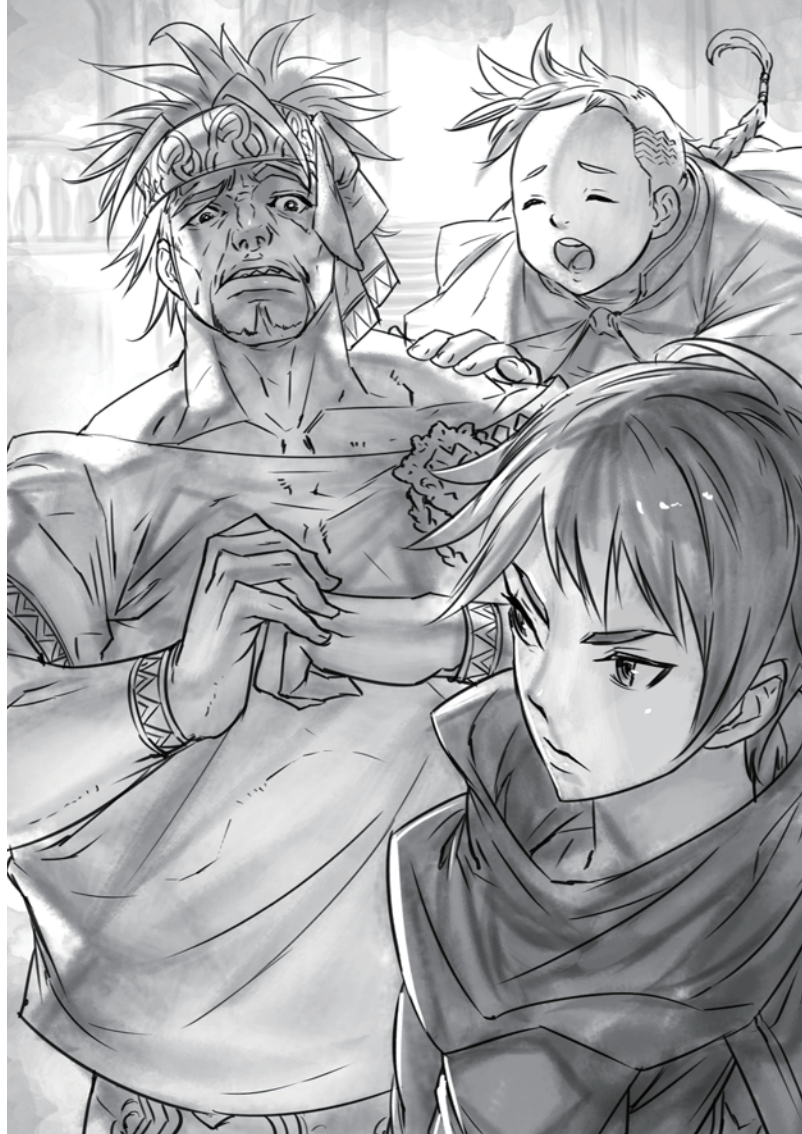
「バ、バジル。ねえ、落ち着きなよ」

タルマに代わり、比較的バジルと仲のいい彼は、困ったように宥（なだ）め始めた。しかし、バジルは鼻息も荒く喚（わめ）き返す。

「わしは落ち着いているっ」

正面ホールの窓がビリビリ震えるような怒声（どせい）であり、顔が真っ赤だった。

「いや、どこが落ち着いてんだよー」



眉根を寄せたレスターは、静かに立つレインとバジルの間に割り込んだ。殊勝にも、喧嘩を止めようとしているらしい。

レスターはレインにも好意を抱いているらしいので、何とかしたいと思ったのかもしれない。

「今のレインは、敵じゃなくて仲間なんだ。以前みたいに熱くなる必要はないんだから——」

「こいつのどこが仲間だああっ」

「うへっ」

さすがのレスターも手で耳を塞ぐようなでっかい声だった。

というか、とうに耳を塞いでいたタルマですら、あまりの音量に顔をしかめた。

「あんた馬鹿なのっ。隠れて潜んでるのが、わからないかしらね！ でっかい声で喚くな、馬鹿馬鹿あっ」

「……おまえの声も、十分すぎるはどうるさい」

レインが横でぶすつと吐かす。

人がせっかくバジルを止めようとしてやってるのに、恩を仇で返すヤツである。

「あんたね」

タルマが吐き出そうとした嫌みを無視し、レインは自ら前へ出た。

「俺に話したいことがあるんだろ？」

「な、なにっ」

荒い呼吸と共に肩を派手に上下させ、レインを睨んでいたバジルが、ようやく戸惑った表情を見せた。

「ちゃんと聞こえたはずだ。その様子では、俺に苦情があるんだろうなと思うが……違うか？」

「そ、そうだった」

唾を飛ばしたバジルに対し、レインは静かに屋敷のドアを指差した。

「だと思った。それなら話を聞こう……外へ出ないか？」

「あんた、脳みそ沸いてんの!? 表へ出ろって、喧嘩売するようなモンじゃないさっ」

「おいおい、レインっ。そりゃまずいよ!」

焦ったタルマとレスターが二人して止めようとしたが、レインはもうさつさと屋敷のドアを開けていた。

「二人で話すのが一番だと思ふ。あんたも、異論はあるまい？」

振り返ったレインが、どうということのない顔で首を傾げた。

まったく平静であり、緊張しているような様子は露ほども見られなかった。これが本心なら、こいつは信じ難いほど鈍感か……あるいはタルマが思う以上に自信過剰の傲慢なヤツだったのかもしれない。

とはいえ、留守を預かるタルマとしては、そのまま行かせるわけにもいかない。

バジル自身は拍子抜けしたように、「む……いいだろう」と覚悟を決めたように頷いて後に続くようとしていたが、とんでもない話である。

「組織内で私闘は御法度だよ! あたしが行かせ——」

タルマは断固として止めようと足を踏み出したが、その前に外に出ていたレインが、振り返って素早く何事か詠唱するのがわかった。

途端に、外へ飛び出そうとしたタルマは、見えない障壁に弾かれておでこをぶつけた。

「いつっ」

頭を抱えて呻いてしまう。

「なによ、これっ」

その間に、レインはバジルを従えて、既に中庭から外の小道へ出て行くところだった。どうも、あいつが魔法でタルマ達を屋敷内に閉じ込めたらしい。

「待て、くおらああーっ」

むかつ腹が立ったタルマは、思わず怒鳴りつけてしまう。隠れ住んでると言ったのは自分なのだが、怒りでそんな配慮は消し飛んだ。

「魔法まで使って人の親切を台無しにする気っ」

渾身の叱声に対し、反応は乏しかった。

振り向いてペコペコ頭を下げたのはバジルのみで、レインは先頭に立ってどんどん先へ行ってしまった。

早くも、角を曲がって見えなくなってしまう。

「ど、どうします?」

坊ちゃん顔のレスターがおそろおそろ尋ねた。

完璧な八つ当たりで、タルマは叱り飛ばしてやった。

「もちろん、シールドをぶち破って追いかけるに決まってるよ! 間抜け顔で『どうします?』じゃないわよっ。あんたがどうにかしなさい!!」

「は、はいいいっ」

「すみませんっ」

レスターはおろか、呆然と立って成り行きを眺めていた主人のヴァレンまで飛び上がった。

☆

黒髪を逆立てたバジルは、悠然と前を行くレインの後について歩きながら、実は微かな畏怖の念も覚えていた。

かつてサンクワールに仕える、もう一人のレインと初めて対峙した時、バジルは内心で激しい恐怖を感じている。あの時は、当のレインからずばりそのことを指摘されたが……似たような怯懦が今再び、バジルを襲い始めていた。

そもそもこいつは、自分がどれだけ怒り狂っているかを知っているはずだ。

バジルは、少年のレインと距離を置いて歩きながら考える。

なにしろ、あのレイファンの山小屋での事件の後、目覚めたバジルは仮の本拠にしていた教会へ戻るや否や、真っ先にレインを呼び出して糾弾したからだ。

レインは大人しく聞いた後、はつきりとクレア誘拐の件を否定したし、何よりもクレア本人が完全に否定した。

レインはともかく、クレア本人にそう言われてはどうにもならず、バジルもその時は洪々、怒りを収めた。その代わり、それから一行が旅立つまで、バジルは徹底してレインを避けた。今度顔を見れば、自分が爆発するとわかっていたからだ。

だがもちろん、レインはちゃんと気付いていたはずだ。バジルの心中に、今も変わらず殺意がくすぶり続けていることを。いや、レインのことだから、殺意どころか嫉妬心だって探知しているかもしれないのだ。

そう思うと、余計に怒りがたぎり出すバジルである。

しかし同時に、我が庭に行くように背筋を伸ばして先を歩くレインの背中を見ていると……忘れていたはずの恐怖心がまざまざと蘇るのも確かだった。

風でも吹けば倒れそうな木造家屋が並ぶ、王都にしては貧しい印象のファンティーヌの街中を、レインは自然な足取りでどんどん進んでいく。

引率されるようについていくバジルは、気が気ではなかった。

こいつは一体、どこへ向かっているのだろうか？ レインにとつてもこの街は初めてのはずなのだし、万一城から派遣された警備隊にでも見つかったら、非常にまずいことになるだろう。それなのに、レインの態度にはコソコソするような様子は微塵もない。

堂々としすぎである。

バジルの心中で、怒りよりも心配の比重が高くなってきた頃、ようやくレインは大通りから路地の方へ曲がり、とある小さな屋敷のドアを開けて入った……しかもノックもせずに開けたのだ。

バジルが顔をしかめて立ち止まると、レインはドアを開けたまま振り向き、顎をしゃくった。

「着いたぞ、この奥だ……邪魔が入らずに話す分にはいい」

こいつ、わしを逆に殺すつもりではないのか？

コトここに至ると、バジルもそう疑わざるを得ない。荒れ放題のこの屋敷は、どうも

空き家に見えるが、それもバジルの疑いを深めた。

クレアに出会う遙か以前は、組織の下っ端として、皆に小突かれながら使い走りをしてきた自分である。当時の背を丸めて生きていた頃のことか思い出され、バジルの怒りはにわかに減じた。

わしは……わしはあるいは、自分など及びもつかないような相手に喧嘩を売ろうとしていたのではないか？

今でも鮮明に覚えていることだが、かつてバジルは、敵となったサンクワールのレインのことを調べていた時、少年時代の彼に会ったという傭兵に話を聞いたことがある。そいつ自身も歴戦の戦士だったはずだが、レインのことを語る時、彼は懐かしそうに目を細め、こう述べた。

「あの人はなあ、俺達とは全然違う人種だと思うね」

……レイン本人より随分と年上のくせに、「あの人」扱いである。

「なに!? それは、ヤツがどこか遠い国から来たという意味か？」

バジルは確か、そう訊いたはずだ。

しかし、その傭兵は馬鹿にしたように鼻を鳴らすと、バジルが奢ってやった酒のグラスを、だんっとカウンターに置いた。

「ちげーよ！ 誰も、あの人みたいにはなれない——そういう意味で言ったんだ」じろっと、そいつはバジルに睨（にら）みをくれた。

バジルが言うのもなんだが、熊でもひねり殺しそうな強面（こわも）だった。

「昔、俺はまだガキだったあの人の戦い振りを見た。当時から、知られざる天才剣士と呼ばれていた、あの人の剣技を見たんだぜ？ その時の戦い振りも凄（こ）かったが……ちよつと一緒にいただけで、俺はもう『ああ、こりゃ腕（うで）だけの問題じゃねーな』と悟（さと）った」

年季の入った傭兵（ようへい）は、ゆつくりと首を振った。

灰色の瞳（ひとみ）に、呆（あき）れたことにある種の憧（あこが）れが窺（うかが）えた。

「違うんだよ、何もかも違う……こつちとは心構（こころかま）えが違うし、目指すところも違う……そんなことはありえねーが、仮に俺が技量で並んだとしても、やっぱりあの人と肩を並べることはできねー」

反論など許さない気迫で、相手が言い切る。

「わかるか？ あの人はな、俺達とは根本から差があるんだって。俺はあの天才剣士を尊敬してるが、どんなに憧（あこが）れても、ああはなれないこともわかってる。多少でも本人を知る者は、みんなそう思ってるさ。だからこそ、あの人は傭兵（ようへい）の中でも別格なんだ」

その時は馬鹿らしくなって内心で笑ったバジルだが、今は笑えない。

振り向いたレインの瞳（ひとみ）を直視している今は、特に。

こいつの瞳（ひとみ）はこんなに静かなのに、見返すとどうしてこうも気圧（けあ）されるのだろうか。

しかし、レインが「どうした？ 話があるんだろ？」と促したお陰で、バジルは覚悟を決めた。

サンクワールにいる本物のレイン相手ならともかく、こいつは未だ（いま）に子供に過ぎない。

今のわしが、何を恐れることがある？

もはや……組織に拾われたばかりの奴隷（どれい）の子ではないのだ。

肩（かた）を怒（いか）せたバジルは、レインに続いて階段を上り、二階にあった開けた部屋に着いた。どういう事情があるのかわからないが、そこは家具がほとんど盗まれた後らしく、椅子（い）が二つほど転がっているだけで、後は埃（ほこり）に塗（まみ）れている。

カーテンだけはまだ窓にかかっていたが、それもビリビリに破けていた。

レインは転がった木椅子（いす）の一つを起（た）すと、そこへ座り、バジルに頷（うなづ）いて見せた。

「ここなら邪魔も入らない。話を聞こうじゃないか」

「は、話だとい？」

バジルは自分は座らず、逆にレインから少し離れ、間合いを置いた。奇襲を警戒したからだ。

「おまえとわしの間に、話すことなどないっ。おまえも、とうにわしの怒（いか）りに気付いているはずだぞ！」

指を突きつけて糾弾（きうたん）する内に、バジルの抑圧（いっあつ）された怒（いか）りが、また膨（ふ）らんできた。

体臭がキツくなり、体毛が一斉に伸び始める。変化しかけていたが、今回ばかりは自分でも特に抑制する気はなかった――が。

「……あんたは勘違いしてるよ」

嘘のように平静な声で言われ、バジルの変化は停止した。

「な、なに？」

「聞こえたはずだ。クレアは俺を気に入ってはいるかもしれない……だけど、特別な感情などないと思う。元より俺は、他人に愛されるような男じゃないからだ」

どういふ思い込みなのか、やたらと確信ありげに言われ、バジルは太い眉を寄せる。相手が本気で述べたように思えたからだ。

「お、おまえはどうなんだ？」

あまりと言えばあまりなレインの落ち着き振りに威圧感を覚え、どもってしまった。

「俺？ 別にクレアは嫌いじゃないが、俺にはもう心に決めた人がいる」

レインは即答した。

座したまま透き通った瞳でバジルを見上げ、息を吐く。セリフの割に、随分と苦しいような表情だった。

「事情が事情だから、あんたには話しておこう……少し前まで、俺には愛する人がいた

んだ。名を、フイーネという。優しくて綺麗な人だった……俺には過ぎた人だった。俺はその人に向かい、『僕の生ある限り、フイーネを愛するよ』と誓った。彼女も、泣きながら俺を受け入れてくれたよ」

レインは右手を胸に当て、バジルをじっと見つめた。

深い湖のような瞳が哀しみに満ちていた。

「だけど、あの優しいフイーネは、もういない。俺のせいで殺されてしまったけれど、あの時の誓いだけは、今も俺の心の中にある。仮にそばにいらなくても、心変わりなどあり得ない。……だから、あんたの心配は杞憂なんだよ」

「ひ、人は変わるものだ」

「少なくとも、俺は変わらない」

レインはゆっくりと首を振った。

「あんたの言う通り、俺も以前は恐れていた。こんなに好きなのに、その気持ちもいつかは薄れていくんじゃないかと。彼女のことを忘れ、自分が彼女を見殺しにしたのも忘れ、何事もなかったように日々を送る日が来るんじゃないかなと。だが、それはないとわかった。今のヤツに遭遇し、その心配は危惧だと悟ったんだ。少なくとも俺の誓いは守られている」

「い、今のヤツというと、サンクワールに仕える、あのレインか？」

呆然とバジルが見返すと、レインは小さく頷いた。

「そう、あいつだ。あいつとやり合ったのは、あんたも聞いてるだろう？ 俺の罵声に、あいつが笑みを引つ込めた時、その顔を見て、ようやく俺にもわかった。ああ、十年経とうが、何も変化してないんだなと。相変わらず俺は、彼女を忘れてない……その時にわかった。おかしい話だけど、ほっとしたよ」

寂しそうに微笑し、レインは続ける。
「それでいい、俺はそれでいいんだ、バジル。フィーネは俺の気持ちに伝えてくれたし、俺もその気持ちを裏切らない。たとえ、もう彼女がこの世にいらなくても、俺の誓いは消えない」

「だから、おまえは黒衣のままなのか……永遠に喪に服し続けるために」

「そうだが、これは自分のための喪服でもある。フィーネが眼前で死んだあの瞬間、俺の心も死んだんだ、バジル。だからこそ、俺は表面的にしか笑えないし、恐怖も感じない。死が目前に迫ろうと、まるで動じないだろう……人並みの感情が持てなくなっているんだ」

レインの告白を聞いて、バジルの心が動かなかったと言えば、嘘になる。

しかし、それ以上にクレアを奪われたと思う気持ちの方が強かった。有り体に言えば、それだけ巨大な嫉妬心を抱いていたと言える。

「ならば……ならば、わしも、変身してお前の肉体を引き裂くことまではすまい。しかし、おまえへの憎しみが消えたわけではないっ」

バジルはそう叫ぶと、数歩下がって長剣を抜いた。

体格にあった長大な業物だが、見つめるレインは特に動じた様子もなかった。

「最初、俺はあんたを誤解していた。あんたがああ山小屋まで追いかけて来た直後くらいまでは。しかしその後数日ほどあんたを見て、あんたは本当の意味で粗暴な男ではないとわかったつもりなんだ」

「……何が言いたいのだ、おまえはっ」

「こんなことは無駄だと言ってるんだ、バジル。あんたには俺を殺せない」

「——！ そこまでわしを」

「俺って言うのではないっ」

レインの叱声に、激しかけたバジルは思わず口を噤む。

どうもこいつには調子を狂わされっぱなしだった。

「あんたは粗暴な割に弱気な男だと思ったのも、俺の勘違いだ。しばらく見ていてわかった。弱気じゃなくて、あんたは優しい男なんだ。確信を持つて言うが、誰かと戦う時に高揚感を覚えたことなどあるまい？ 時には人を殺すこともあるんだろうが、そ

れは常にやむを得ない時だけだし、いつだってあんたは嫌々やってたはずだ」

弱虫とか弱気だとかはよくタルマに言われるが、バジルの人生において『優しい』などと言われた経験は皆無である。

啞然として見返すバジルを無視して、レインはなおも言う。

「俺は優しいヤツにはほど遠いが、少なくとも理由もなく人を殺したことはない。そして、今の俺にあんたを殺す理由なんかないんだ」

「おまえになくても、わしにはあるっ。この問答自体が無意味だっ」

気圧されまいとバジルは大きく長剣を振りかぶり、汗まみれの顔で静かに座るレインを睨む。

「抜け、レインっ。さもなくば、このまま首を刎ねるまで！」

「それはクレアのためになるのか？ 彼女が本当に喜ぶことか？ おまえは一時の怒りと嫉妬に、我を忘れてるだけだ。言ったはずだぞ、あんたが俺を斬ることはない。俺がみえみえの挑発に応じない限りは、な。もちろん、俺は応じないが」

背筋を伸ばして座すレインは、バジルと違って汗一つかいていない。

少なくとも、こいつが相応の覚悟で言ってるらしいのは、確かだった。

「では、無抵抗で死ぬがいいっ」

しゃがれ声でバジルが唸ると、レインはとうとう魔剣に手をかけた。

ある意味、バジルはほっとしたほどだが……あいにく、レインは魔剣を鞘ごとベルト

から外し、足下に置いてしまった。

「よく考えたら、今は無用だしな」

「くだらぬ真似をつ。わからないのか、おまえは死地にいるのだぞ！ わしに、無抵抗な相手を殺させるなっ」

「あんたこそ、何度も言わせるな。俺にはあんたを斬る理由がないし、自分で言うように、あんたも無抵抗な男を斬るヤツじゃない」

不思議なほど穏やかな表情だったし、奇妙な自信に溢れていた。

「それこそ、ガキの甘い見通しだ！」

「俺は自分の確信に自信があるが、それが誤りだとすれば、そんな甘い性根のヤツが今後とも戦いに彩られた人生を送れるとは思えないな」

他人事のように、丸腰になったレインは肩をすくめる。

「今を生き長らえても、どうせすぐにくだらない死に方をするに決まってる。だから——」
殺気とは無縁な瞳でバジルを見た。

「……だから、ここであんたに殺されても同じことだと思う。勘違いしたガキが、一人死ぬだけのこと。ほら、本気なら今が絶好のチャンスだぞ。俺は一切抵抗しない」

「め、冥界で後悔するがいいっ」

そうだ、貴様は誤っているっ、とバジルは奥歯を噛む。

わしがどれだけクレア様を大事に思い、後から現れた貴様に憎悪を燃やしている

か……それが少しもわかっていないっ。

そんなこともわからぬからこそ、まだまだこいつはガキなのだった。

……そう思い定め、思い切って長剣を振り抜こうとするが……なぜか手にした長剣が千キロもの重さを得たように、腕が震えた。

すぐ眼下にある白い首筋に叩き付けば終わりなのに、どうしてもそれができない。見つめるレインの黒い瞳に、ガタガタ震える自分の巨体が映っていた。なのに……レイン本人は平然と座したままなのだ。

あの名も知らない傭兵が言うように、やはりこいつは希有な男かもしれない。そこはバジルも認める他はなかった。

しばらくバジルを眺めた後、レインはこの魔屋に入った頃より、よほど優しい声で呟いた。

「見られているとやりにくいかな？　なら、目を閉じよう」

げんか
言下に、本当に目を瞑ってしまった。

それきり、ふつつりと黙り込み、彫像のように動かない。

本人が言う通り、どれだけ甘ちゃんなのかと思うが……不思議なことに、バジルはこれだけお膳立てしてもらっても、やはり長剣を振り切ることができなかった。

いや、それどころか首を刎ねようと己を叱咤すればするほど、どうあっても斬りたくなくなってきた。

そもそも……バジルの本性を知り、それでいてなお弱虫扱いしなかったヤツが、これまでどれだけいただろうか。

皆、嘲るか恐れるかの二つに一つだったと言ってよい。

クレアだけはどちらでもなかったが、しかしバジルにとつてあの方は主人でしかなく、向こうももちろん、仲間か配下としか見てはいないだろう。

しかし、まだ会って間もないレインは、バジルを優しい男だと評してくれたのである。顎先から床に汗を滴らせつつ、バジルはとうとう息を吐いた。

確かに……こいつは他のヤツとは違う、全然違う……そして、わしは丸一日ここに立っतीयようと、最後までレインを斬ることはできないだろう。

なぜなら、この少年はこの世界で唯一、自分を理解してくれた相手だからだ。

気付けば、バジルは長剣を鞘に戻し、ふらふらと部屋を出ようとしていた。

レインが立ち上がるうとする気配がしたので、断固として言い渡した。

「……わしは組織を抜ける。斬れないなら、もうあそこにはいられない」

「なぜだっ。俺は——」

「黙れ、レイン」

バジルは振り返ることができないまま、声を励ます。

「少しでも情けがあるなら、わしのことは追うな」

「……あんたがそう言うなら。だが、いつでも戻ってこられるようにしておく」

「いや、もう戻ることはない……ないと思う」

バジルはドアを開け、廊下に出た。

そのまま、後ろ手にそっとドアを閉じる。

「クレア様のことは頼んだぞ」

囁き声だったが、多分、あいつには届いたはずだ。

廃屋を出て、元の大通りへ戻った時、バジルはいつしか頬を涙で濡らしていた。

我ながら女々しいことだとは思ったが、どうしても止められないのである。

見るからに強面の大男が泣きながらずんずん歩くせいとか、見つけた通行人達が慌てて飛び退く始末だった。

……そんな風に気が散っていたからだろう。

いつしか彼を黒いローブの男が尾行し始めていたのだが、バジルは全く気付いてなかった。

☆

大騒ぎしてシールドの解除はなったものの、結局は探すまでもなく、レインはしばらくして戻って来た。

当然ながら、タルマはレインを引きずるようにして、居間として使っている大部屋まで連れて行った。やはり気になるのか、恰幅のよいレスターが後に続き……なんと、戻ったばかりである、宗主のクレアまでもが後から部屋に入ってきた。

怒り狂ったバジルを引き連れ、レインが屋敷を出て行った話は、戻ったクレアにもすぐに伝わっている。お陰で、さすがに心配になったらしい。

なぜか帰りはバジルを連れず、レインが一人で戻って来たので、なおさらだろう。

部屋のドアを閉め、鍵までかけた後、タルマはレインの正面に座る。クレアとレスターはそれぞれタルマの左右に座り、そう大きくもない丸テーブルで、皆が不景気な顔を見合わせるようになった。

「なんの審問だよ、これは」

実際、憮然としたレインがそう述べた。

「いえ、審問のつもりではなく、ただ心配で——」

などと言いかけたクレアを遮り、タルマはテーブルを軽く叩く。

「レインを甘やかさないっ。もちろん、これは審問よ。バジルはどうしたのさ、レイン？」
ぎらっと睨んでやると、レインは生意気な仕草で肩をすくめた。

「出て行った……もうここにはいられないそうだ」

「えーっ」

真っ先に、仲が良かったレスターが叫び、クレアが口元に手をやり、タルマは思いつき顔をしかめた。

「なんでえ？ 理由は聞いてるんでしょね」

「いや、聞いてない」

堂々と吐かすレイン小僧である。

「何か心境の変化があったのだろう。しばらく組織から離れたいうのだ」

……ただ、こいつにしてはどこか後悔するような口ぶりであり、なんらかの事情があるのは間違いないらしい。

そもそも、バジルがクレアにほのかな思いを寄せていたことは、近い者にはほぼバレていたわけで、しかもあの大男が新参のレインを恋仇のように見ていたことも、少なくともタルマとレスターには明らかだったはずだ。

そこで当然ながら、タルマはレインをしんねりで見やり、ずばり尋ねた。

「あんた、あいつを叩きのめしちゃったんじゃないの？」

でもって、悄然としたバジル

が、泣きながら出て行っちゃったとか」

レインは眉をひそめたが、はつきりと首を振った。

「言っただけで、あいつと戦いになどならないと。事実、俺は街の片隅であいつと話しただけで、剣も抜いてない」

全員、顔を見合わせたが……タルマが見るところ、この返事に関しては、レインを疑う者はいなかったように思う。

例えば、争いに及んでバジルを叩きのめし、最後に命を奪ったのだとすれば、レインは必ずそう述べただろう。余計な言い訳などするまい。

それは、レインに厳しいタルマでさえ、認める他はなかった。

こいつはその手の嘘はつかないヤツだと思う。ある意味、不器用過ぎるほど不器用なので。

ただし、タルマが「でも、事情は深そうだわね？」とぼそつと告げると、レインはあからさまに洗面でそつぽを向いた。

やはり、なにか複雑な事情があるようだ。どうせ恋愛絡みだろうが。

「まあでも……出て行ったものはないか？」

考えた末にタルマが言うと、クレアとレスターがさっとこちらを見た。

「姉さん、そんな簡単に！」

「いやつ、ちよつと探す努力くらいはしましょうよっ」

憤慨したような二人のうち、タルマはレスターをじつくり眺めた。

「あんただって、なんでバジルが怒り狂ってたかは知ってるでしょう。本人がここにいないって言うなら、あいつにとつてもその方がいいと思わない？」

「う……そう言われると……まあ……そうですけれど」

ただでさえふくよかな頬を膨らませ、不承不承、インチキ神官服のレスターは頷く。

「でもほら、やっぱり友達としては、探して一言くらいは言いたいかなあみたいな——」
「じゃあ、ボヤいてないでそうしなよ」

タルマはあつさりと言を翻した。

「本人の口から聞くのが一番だろうしね。ほら、今ならまだ追いつくかもよ」
言われて、レスターは背中を押されたように立ち上がった。

すかさずレインが「メインストリートを東の外れの方へ行っと思った」と述べたので、
「ひ、人を集めて探して来るよつ」と返し、ドタドタと部屋を出て行く。

そのまま廊下を走っていく騒々しい音が、少しずつ遠ざかっていった。

「やれやれ……ホントに追いついて、また一騒動起きないといいけど」

他人事のようにタルマが呟くと、クレアが不審そうな表情で訊いた。

「あの、なぜか私以外はみんなバジルさんが消えた事情を知ってる雰囲気に見えるんですけど、どういふことですか」

「あんたが気にすることじゃない」

レインがいつになく素早く言う。

「これはあくまでも本人の問題なんだ。とにかく、しばらく組織を離れたいそうだから、
休暇をやったと思えばいいんじゃないか？」

「休暇……ですか」

考え込むようなクレアを、タルマは横目で呆れて見やる。

いつもながら、この子もたいがい鈍いし！と思うものの、レイン同様、ずばつと教えてやろうとは思わなかった。聞いたところで、クレアとてどうしようもないだろうから。だいたい、クレアはバジルが出て行ったと聞いて心配しつつも、シヨックまでは受けていない。

あくまで仲間を思うが故であり、それ以上のものではないのだ。

だとすれば、真相を教えて何になるのか。

それに、レインが言わないくらいだから、バジル本人もクレアに教えてほしくないの
だろう……きっと。

タルマはそう判断し、余計なことは一切言わないことにした。

結論として、バジルの出奔は確定的となった。

夜遅くに戻って来たレスターとその配下達が、「手分けして王都中を探したけど、見つからなかった」と肩を落としたからだ。

おそらくバジルも、レスターなどが追ってくるのは予想していて、とつとと王都を脱出したのだらうと思われる。

この報告を聞き、クレアは屋敷で待機中のメンバーを集め「バジルさんはしばらく組織を離れたいそうです」と宣言し、この件は一応の終結を見た。

ただし、最後にバジルと会ったレインはもちろん、親しかったレスターも完全に納得はしてないようなので、組織としても、活動の合間に彼の行方を探することになるだろう。ただ、なんとなくタルマ自身は、もうバジルとは二度と会わないような気がしている。あいにく、後になってからそれが甘い見通しだったと知れるのだが……少なくとも今は、(タルマ的には) 他にもっと大事なことが控えていたのも事実だ。

というのも、主城攻略の無謀な計画が、いきなり動き始めたのである。

騒ぎからさらに三日を経て、レインはまた同じメンバーを居間に集め、ぼそつと言った。

「そろそろ、マイエンブルク城を落とそうと思う」

攻城戦の話というよりは、「そろそろ猫を飼おうかと思う」みたいな清々しいまでに緊張感のない口調に、呼ばれたタルマ達は呆れた。

クレアでさえ、まじまじと目を見開いたほどだ。

それらの一切を超然と無視して、レインは一人で腕組みなどした。

「ただし、調べるうちに気になるところが出てきた。バルダー王とマイエンブルク城については、ひどく不自然な部分がある」

「あたしに言わせりゃ、あんたの計画自体が思いっきり不自然に思えるわね！」

タルマはすかさず口を挟んだ。

「しかも、まだ一言も計画の内容を聞いてないし」

レインはさらりとタルマを無視した。

「調べる限り、バルダー王の即位から三年の間に、二度ほど有力騎士達の反乱が起こっている。計画は外から見るとかなり成功率が高そうに思えたのに、なぜか二度とも首謀者は死んでいる」

レインは洪面のタルマを含め、三人をぐるりと見渡した。

「特に去年起こった反乱騒ぎでは、バルダーが信頼する騎士隊長が、主君が一人になる絶好のチャンスを見計らって斬りかかったらしい。しかし結果的に彼は返り討ちに遭い、首を刎ねられた」

「バルダー王って、威張り散らしてる癖に弱っちいヤツだと聞いたけどなあ」

レスターが首を傾げると、クレアも不審そうに問うた。

「王は、巷間の噂より腕が立つということですか？」

レインはきっぱりと首を振った。

「いや、どうも街中で囁かれる噂の方が正しいらしい。二年前、珍しくバルダーが城

**立ち読みサンプル
はここまで**

外に出て、王都ファンティヌを視察したことがある。その時、機会を窺っていた住民達が決起して、十名ばかりで王の行列を襲ったんだ。当時の彼は、剣を抜く以前に、腰を抜かして這って逃げたようだ」

「……めっちゃくちゃ暗殺しやすそうだよな」

レスターが呆れて笑った。

「じーさんが生きてたら、その時点で一発で片を付けたかもなあ」

亡くなった老魔法使いを思い出したのか、どこか寂しそうに言う。

「ところが、その時に襲撃した十名は、全員その場で息絶えている」

レインは、いきなり冷水を浴びせるようなことを言ってくれた。

「しかも、どうやって彼らが倒されたのか、はつきり見ていた者が誰一人として見つからない。当時の目撃者も探し当てたが、そいつの話だと『襲撃者は全員、図ったように同時に倒れた』と言ってたな」

静まり返ったテーブル上をまた見渡し、レインは低い声で続けた。

「考えてみれば、心ある臣下の騎士達が軒並み離散し、現在はご機嫌取りだけが能の取り巻きしか、ヤツの周囲には残っていない。城に籠もりきりとはいえ、ある意味で隙だらけなのに、どういうわけか誰もヤツを打倒できないようだ。ヤツには、明らかに謎がある」

寒気がするような内容の割に、レインは特に気負う様子もない。

「外から調べただけでは、バルダーの不可解な部分を解明するのは困難なようだ。問題の謎を知るためには、結局は計画を実行し、ヤツと向き合うしかあるまい」

——故に、俺は攻略作戦を執行することにした。

などと、このレイン小僧は悪びれずに吐かすのである。

「あ、あんたね……」

落ち着いた態度で、途方もなく大馬鹿な発言をするレインに、タルマは思わず頭を抱えた。

こいつに組織の命運を賭けようというのだから、クレアはよい根性をしていると思う。可能ならレインの噂も聞こえないほど遠くへ逃げたいくらいだが、あいにくタルマの立場としてはそうもいかないのだった。